

活動日誌 (1969.7~1973.3)

<出発までの日誌>

1969年

7月上旬 松本、川本(のち退部)の間で「アマゾンへ行こう」という話がもらあがる—阪急の車中にて。

7月22日 第1回集会。梅田05コーヒークラスにて10時。参加者は松本、川本、杉井(のち退部)。調査対象—民族・魚類、地域—アマゾン河全流域、期間—1971年3~9月、費用—個人負担50万+寄金50万—という現実離れた話。

8月13日 チームの名称をアマゾニア企画委員会として発足。

16日 企画書作成。対象地をリオ・ネグロ、シンガー流域とする。

29日 部内に企画を発表。川西市の寺にて。

— わが関大もこの年の5月以来紛争状態にあり、部内でもこの問題で日夜議論した。また学内立入禁止状態が続き、部の平常な活動がほとんどできない状態が続く。

9月上旬 松本、とにかく人に会って話をきこうと東京へ—上野水族館、ブラジル大使館、国立科学博物

館、海外移住事業団、ヴァリグ航空、商船三井。津田、計画に参加。

勉強会をし、また部内で説明会をいくたびか行なうとともに他大学探検部、在伯邦人、学識者etcに計画を説明し協力を要請。

10月上旬

藤本、参加

下旬

松本、前裕(のち退部)東京で渉外—田畑弘氏(画家)、新井良一氏(国科博)、土居祥兌氏(国科博)、和田正三氏(東大)、多紀保彦氏(東農大)、コロンビア大使館

12月中旬

第1次計画書発行—『(ブラジル・コロンビア・ベネズエラ)アマゾニア踏査一次計画書1971 関西大学探検部』—この時点でメンバーは松本(2年)、藤本(1年)、津田(1年)、杉井(1年)、川本(1年)、前裕(1年)の大所帯となる。

1970年

1月上旬

松本、津田、東京へ—神田鍊蔵氏(東大)、大倉興司氏(東京医歯大)、藤沼英郎氏(日本TV)etc。この結果目的がほぼヤノママ族調査に絞られる。

1月下旬 韓国合宿の準備に追われる。
 ~
 3月 2日 『大韓民国徒歩縦走トレーニング
 ~19日 グ合宿1970関西大学探検部』
 を行なり。ソウルからプサンへ
 400kmを独りで歩こうという
 もので個人の<総合的判断力>
 を要求される一人旅の経験と海
 外旅行の体験および敢闘精神の
 養成。参加者；CL三宅、松本、
 藤本、津田、杉井、川本。
 4月29日 合宿 — 研究、資料整理、ポル
 ~5日 トガル語 etc。
 5月~6月 夏期合宿のための食糧、装備、
 薬品の調達のため在阪企業をま
 わる。
 7月10日 『屋久島トレーニング合宿1970
 関西大学探検部』を行なり。高
 温多湿のアマゾンを想定して様
 々な生活技術 — ハンモック・
 カヤ・軽量食品 etc の試験と
 応用をしながらの山行。参加者
 ；CL松本、藤本、津田、中村。
 8月末~ 合宿。資料整理
 9月初
 10月上旬 天鷲良雄氏（京都産業大助教授
 ・当時）隊長に就任。関大へ
 「人類学」の講師にこられてい
 た。
 9月中旬 合宿 — 資料整理、計画再検討。
 10日 本田光衛氏（マナウス在住）来
 阪。以後2カ月大阪・千里山に
 滞在。ポ語講習。
 11月上旬 『アマゾナス踏査計画書1971
 関西大学探検部』発行

1971年

— 以後数カ月沈滞気味。資金面を
 はじめとする、他力本願な今まで
 の姿勢に転換をはからざるを得な
 くなる。アルバイトに精を出す。
 『参考資料1971関西大学探検
 部アマゾニア踏査委員会』発行。
 4月 1日 メンバーは松本（4年）、藤本
 （3年）、津田（3年）となる。
 4月~5月 貨物船便乗の件で海運会社をあた
 るが不調 — 最大の悩みはばく大
 な渡航費であった。
 5月中旬 松本、外務省へ。ブラジル国内に
 おける学術探検許可の件。
 8月上旬 英文計画書作成 — 『FIELD
 INVESTIGATION IN THE
 NORTH WEST AMAZONAS
 1972 THE KANSAI UNI-
 VERSITY』
 8月 日 『琵琶湖航行合宿1971関西大学
 探検部』を行なり。ゴムボートに
 よる琵琶湖縦断と水上生活の経験。
 松本、藤本、津田、梶谷、植原。
 8月末 公式文書（対ブラジル政府・領事
 館、国立アマゾニア研究所）の作成。
 『参考資料②1971関西大学探
 検部アマゾナス踏査委員会』作成。
 9月15日 天鷲良雄隊長、招待教授としてア
 メリカ・サンディエゴ大学へ。
 21日 ブラジル領事館へ「科学的探検の
 許可」取得の申請。在マナウス
 の当該機関にも各々の書状を出し協
 力依頼。以後書簡を往復。
 11月1~ 医者探しに津田、東京へ — どこ
 5日 にも我われのようなヒマな医者は
 いなかった。

- 13日 部内に派遣委員会発足。専門的にOBをまじえて検討する。
- 12月上旬 領事館に資料を送り、さらに詳細に説明。

1972年

- 1月下旬
~
2月中旬 OBとの会合が多く持たれる。ブラジルからの許可に対するSimかNa'oの解答を予測しながらの話あいで、いくら話しあっても、いっこうに結論らしきもの出ず。

- 2月22日 領事館より不許可の通知。
末 「許可状」なしで天鷲隊長と松本の現地交渉に期待を託し、計画を少々縮少して行なうことになる。

- 10日 『関西大学アマゾナス踏査計画書1972 関西大学探検部』発行。期間は3月~9月と当初の1年間より大幅の縮少。もし入域できなければ観光旅行(予備調査)をしてくるというものであった。援助金、約ゼロ。
— この2カ月はOBとモメにモメた。最後はこのような形になり、だれに期待されることもなく、気楽に、そして不安と悲壮感で胸をいっばいにしながら……。

<行動日誌>

- 2月23日 松本隊員出発(羽田)。カリフォルニア州サンディエゴの天鷲隊長宅へ。
- 25日 天鷲、渉外のためブラジル・ブ

ラジリアへ。松本、ブラジル国査証取得のためコロンビアへ。神戸の領事館では目的を知った以上、観光ビザは出せないとのこと。

- 3月29日 松本、マナウス着。先着の天鷲と合流。天鷲隊長のFUNAI(インディオ保護局)との話し合いによってカマノウ河いきが決まっていた。両名、FUNAIの船でマナウス発。

- 30日 居住地域から下流のポスト(出張所)に下ってきた「アイ・ミリーズ族」を調査。

- 4月1日 天鷲、松本、マナウス着。マナウス日本人学生寮(正式名=Casa dos Estudantes Japoneses do Amazonas)に入居。以後、ここが現地本部。在マナウス日本領事館、在留邦人、日本人植民地などにあいさつ。FUNAIに次回の入域についての交渉。通訳は領事館の大和田氏。

- 5日 天鷲、帰米。

松本、皮膚病になる。

- 11日 FUNAIのポストと会談。ジョン・ウッドさん(New Tribe Mission)と会談。奥地の情報を得る。

次回の調査地域はジュマ河。準備して出発待ち。

- 25日 出発用意してFUNAIに行く。

—「あした出る」の返事

- 26日 FUNAI。 —「あした出る」

- 4月28日 FUNAI。—「あした出る」
 29日 出発。ジュマ河へ。メンバーは松本とFUNAIからサバとプロフィール。
 アウタエズ河をのぼり、ポスト（保護局出張所）につく。
- 5月 2日 アロエイア・ジュマ着。インディオ3家族と会い。1日滞在。
 5日 マナウスに帰る。
 8日 FUNAIに行く。ポストと会見。
 10日 さらに入城したいと希望。下町を連日あるく。
 14日 FUNAIに行く。今回はヤノ Mam族入域がきまる。我われがねらっていた部族に、こんなに簡単に入れるなんて。
 15日 準備に入る。
 23日 出発予定日から「あした出る」と5日以上またされる。
 24日 「出ない」 ムッ。

第1回ヤノ Mam族調査（予備）

- 5月25日 出発。—後発の藤本、津田は10日ほど前に、もう来ていなければならぬのだが、資金面などで離日がのびのびになっている。松本、大いに気をもむが後発、まにあわず。失敗その1。FUNAIの船でマナウスを夜出る。乗員は松本とエスメラジンとハイムンジン（FUNAI）その他。
 26日 カマナウ河ポスト着。
 29日 パルセロス着。この日、後発の藤本と津田離日し松本と同じル

ートで6月4日マナウス着。学生寮に入居。

- 5月31日 同発
 6月 4日 ポスト・アジュリカバ（ヤノ Mam管轄・FUNAI出張所）着。日本人としては4人目。
 9日 同発。メンバー—松本、エスメラジン、ハイムンジン（FUNAI）、インディオ3人の計6人。
 10日 アンタ（バク）捕獲。
 11日 ベネズエラとの国境の山々が見える。
 12日 マブラウ・デミニ出合、トトビ・デミニ出合、無人のパキダリ族・ジュセ部落に泊。
 13日 シリアナ族・ロベルト部落着。男子の歌を聞く。
 14日 女子の歌を聞く。
 15日 シリアナ族・ブリニョ部落に行く。
 16日 ロベルト部落に戻る。
 17日 同発。
 18日 ワイカ族・ジャコ部落着。歌とダンスを見聞。
 19日 同発。ポスト・アジュリカバ着。
 22日 ポスト発
 23日 パルセロス着。
 26日 同発。
 28日 マナウス着。後発の藤本、津田と合流。次回も8月末あたりにヤノ Mam族に入れそうとのこと。
 29日 FUNAIに行く。
 8月末までに距離的に近い部族に入りたいと希望するが、FU

NAIの船は、いまみな、出は
らっているとのこと。船が戻っ
てくるのを待つしかない。

7月 9日 日本人植民地と学生寮で対抗野
球大会。

13日 FUNAIに行く。船はない。

16日 日本人会の宴席でフォークを歌
う。以後、たびたび、およびが
かかる。

17日 FUNAI。依然として船はな
し。

21日 FUNAI、あいかわらず船が
ない。8月末までの入域はあき
らめて、8月末からのむこう4
か月と予想される旅行のために
ビザの再取得をしにコロンビア
まで行くことにする。

コロンビアのレティシアまでア
マゾンの船旅を楽しみながらの
旅行である。

アマゾン本流のマナウスより上
流は定期客船はなく、商売船が
走っているだけで、棧橋にずら
り停泊している船に片ばしから
あたるわけである。切符など
はどこにも売っていない。29
日の船に決める。

29日 船は出ない。1日とのこと。

8月 1日 「あした出る」

2日 「あした出る」まだ荷物を積み
終わってないからであろう。客
はおまけなのである。

3日 「あした」

4日 出発。

乗客は日本人3名、アメリカ人

1名、ペルー人2名、ガイアナ
人2名、コロンビア人1名にあ
とはブラジル人と国際色豊か。
外国人は若くて金のあまりない
連中ばかりで、カメラやテレコ
をもっている我われのことを
「金持ち」と思っている。アマ
ゾンの船の寝具は1等以外は持
ち込みのハンモック。河風に揺
られながら眠るのは最高だ。

8月13日 ベンジャミン・コンスタンチ着。
出国手続を済ます。レティシア
(コロンビア)に入る。

14日 入国手続。この町にただ1人の
日本人の話し相手になる。また
ビザ取得の便宜をはかってもら
う。

16日 ビザ取得。レティシアを飛びた
つ。マナウス着。

8月下旬 日本人の若い旅行者3人が学生
寮に1週間ほど泊まっていく。

30日 FUNAIのヤノマム族担当の
職員、エスメラジンの家に遊び
にゆく。9月中旬に出発予定と
のこと。

9月 6日 FUNAIに行く。ボスは、来
週には出発する、という。

7日 準備。食糧、装備、交換物資等
をそろえる。日本へ大量に手紙
を書く。夜は日本人会の最大の
祭—紅白歌合戦がある。大い
に栄養をつける。

準備におわれる。

13日 準備も一段落つきブラジル選手
権サッカーを見にゆく。

9月15日 出発は3~4日後とのこと。
 18日 "
 20日 "
 23日 出発はあさって。
 25日 "
 27日 出発はあした。
 28日 あした出発。

10月 1日 8時発。船は2隻となる。16時、とある場所に停船してラジオのサッカーを聞く。最大のトーナメント — ブラジル選手権の最中で、地元の「ナショナル」に皆で応援する。2時間ほど走って停船。

第2回ヤノママ族調査（本活動）

9月29日 午前11時出発。12日間も待たされたのがりそのようにいきなり出る。拍子ぬけする。こんな出発は日本人には、さみしい。曇天。FUNAIの小さな発動船を横に3隻、連結してゆく。乗員はエスメラジンをリーダーにプロフィール、イブ、エスメラウドのFUNAI勢と我われ3名にポストのインディオのマリオそれに途中下船する便乗者が10名程である。FUNAIも今回の巡察には力を入れているようで船にはファミリーナ、塩砂糖、医薬品、刃物類、ガソリンetc 我われの数10倍の物資である。夜は、多くの荷物でよけいに狭くなった船内に、かろうじてハンモックを吊り、寝る。

30日 6時発。午後から雨になり一時接岸する。老朽船なので、そこからじゅうから雨もりして、寒くてガタガタふるえなければならぬ。22時半、ポスト・カナウ着。松本、顔見知りと会う。

2日 6時発。朝、エンジン音で起床。ハンモックをたたみ、かたわらに流れる水で顔を洗う。そして炊事係が、我われに敬意を表してか、まず一番に食事を運んでくる。朝はカフェとビスケットである。おわると、再びハンモックを張るか、甲板（というほど大それたものではない）に座ったり、寝ころんだりして、河か岸をぼんやりとながめたりする。船はつねにどちらかの岸につけて、経済的に走る。岸辺のジャングルを猿や鳥がかけめぐり、水辺には水鳥たちが遊ぶ。また砂浜にはワニなどがいることもあるが、エンジンの音ですぐ隠れてしまう。FUNAIはなにぶん予算が少なく、エンジンもときどき不調をきたす。天気は快晴で非常に暑い。18時半、停。暑くて眠れない。水浴、なお暑い。

3日 6時半発。河幅がみるみる広がる、と思ったら、13時半にバルセロス(Balcelos)に着く。ここから対岸は、かいても見え

ない。人口が15000人程度の町で、空軍の飛行場があり、軍服が目だつ。当地2回目の松本の案内で学校を見学したり、友達を訪問したりする。夜は町の広場で子どもたら大勢にとり囲まれて、歌わされる。ブルコメの『心の虹』をリクエストされる。知らなかったので「はやってない」といったものの日本のうら側にこんな歌がと、少々驚かされる。23時、やっと船に戻される。

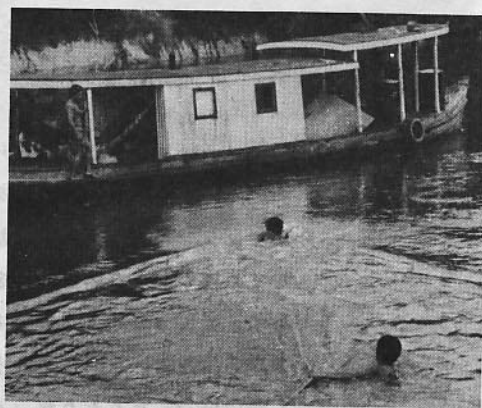
10月4日 明日出るとのこと。学校を見学、小学生に算数を教える。教師、我われにまかせっきり。夜、しばしの別れと、コカ・コーラを味わって飲む。これから先こんなものはない。

5日 8時、ポリスにパスポートを見せに行く。やはり警官は態度が大きい。9時半発船、ポストに向かう。ポストのマヌエル一家とアナスターシャが乗り込んでくる。午後リオ・アラサに入る。アラサの支流がデミニで、そのまた支流がトトトビである。このあたりから減水しているのがはっきりわかる。船底が川底につかえ始める。兩岸まで数kmはあろうと思われる河のど真中で砂に乗り上げたりする。ロープで引っ張る。18時停。マナウスからともに来たポストのインディオ、マリオが発熱。

看病する。

10月6日 リオ デミニに入る。昨夜、ヤスでついた魚をさばいている。ナマズの類が多い。昼は今旅行初のベシアーダ(アマゾン風うしお汁)を喰らう。このあたりからビュン(ブユ)の登場である。日本のそれよりもタチが悪く、噛み口が小さく、皮下に小さな血の点として残るのでとてもかゆい。17時、赤道をくぐる。21時停。

7日 10時発、川幅は狭くなる。狭い所で30m位になる。しばしば底がつかえ、皆で引っ張る。水はぬるく、底は砂地で快い労働。午後から雨。寒くてふるえる。ビュンも多くなってくる。昼、夕食ともベシアーダ。



8日 減水のため船を切り離してルートを探しながら行く。だれかがモットン(ワイルド・ターキー)を鉄砲で撃ってきて、昼飯に供

す。正午、激しく降り出す、浸水ひどく、寒い。雨が小降りになると、今度は底がつかえる。ビュン、ますます多くなる。18時停。夕食はカメ。じゃっかん抵抗があったが、食べてみると美味。

10月 9日 6時半発。8時、底がつかえる。切離して主船を先にやり、もう一隻を皆で引っ張ってゆく。非常な労働。10時、雨。昼食は豪華にもモットン、カメ、パイアである。13時、ゴム畑で日射病の老人に薬を与える。途中で船と出合うたびに薬を与えてきた。インディオのマリオもまだ、容態がはかばかしくなく、下痢をくりかえす。津田も体の節々がきしむ感じ。やたらと病人が多い。

10日 6時発。昼食カメ。マリオの不安そうな顔がだんだんほころんでくる。13時半、ポスト・アジュリカバ着。総出で迎えられ、あいさつする。松本、再会を喜ぶ。ブラジル人が増えており、ワイカ族の面々がいる。荷を降ろす。炎天下の中、重労働でふらふらになる。水浴して散歩。「長い旅行になりそうだ。インディオ調査は、これが最後になるかも知れぬ。文明がヒタヒタと押し寄せているのを感じる。」(松本記) 夜は歓迎パーティーがあったが、疲れたので遠慮

する。

10月11日 6時起床。津田(医療係)、松本がポストのすべての家を往診。皮膚病多し。ポストの酋長マテウスが腰打撲にて出発遅れそう。

12日 津田発熱40℃、下痢ひどし。FUNAIから、日数がないため2パーティーに別れるとのプランをいわれ、検討する。減水のため前回カヌーで行けた部分大幅に削られ、ボッカになるとのことである。マリオに注射を頼まれ、冷や汗かきつつ、松本がする。注射技術は絶対必要だ。津田、終日寝て小康を得。

14日 出発するはずだったが、いつものことである。

15日 船外機調整のため出発せず。藤本、下痢。

16日 ついに7時40分出発する。船外機付きの大カヌーが2隻と小カヌー5隻に予備の船外機1機。総勢20名におよぶパーティーである。FUNAI(エスメラジン、プロフィール、イブ)とブラジル人(マヌエル、アナスターシャ、アントニオ、マリオ・ジラス、クリスチアーノ)とポスト・インディオ(マテウス、ジョーゴ、ワウデマ、カーロス)とワイカ族(ジャコ、ルーカ、ジョナス、アントニオ、ノーエ)と日本人3名。津田不調。出発してすぐに、もうカヌーを引っ張らねばならない。昼食は釣っ

た魚 — ピラニア、ピララーラ（大ナマズ）を喰らう。ワイカ族のルーカスが熱を出し、看病する。昼すぎに雨が降り、午後は涼しい。川幅は雨季の時よりもかなり狭くなっている。流れも弱い。この日は地面に寝る。

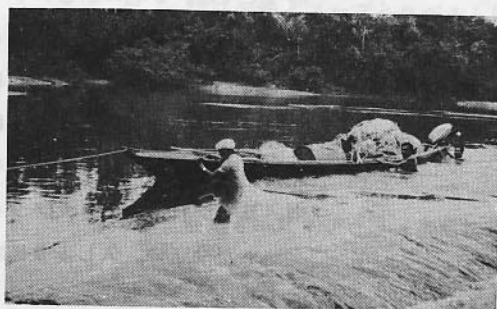


10月17日 7時すぎ出発。この日も2回、ザイルで船を引っ張る。昼はカフェとファリーナで済ます。午後から晴れて暑い。カヌーの場合帽子をかぶる位しか方法がない。ピュンから身を守るため、長袖を着て、その下ではタラタラと汗を流している。雨が降ると寒いので、「曇り」を希望してやまない。18時停。ワニを見つけて鉄砲で撃つ。賞味する。くさいが珍味。津田、ひざ関節ガタガタで歩行が苦しい。ルーカスも熱、下がらず。

18日 7時半出発。津田、ひざ以外に

肩、足首も痛む。ルーカスも激しい下痢。暑さが厳しい。飯は魚とファリーナだけである。カフェが楽しみである。カヌーの引っ張り、計5回。16時停。いつも宿泊地点につくとすぐ、ハンモックをつる木を探して、つるす。我われは、この中でシュラフに裸でくるまって寝る。ここで、1m50cmもある電気ウナギを見る。このあたりになると、ピラニアは「いれぐい」だ。大きいものは60cm位ある。

10月19日 7時半発。今日もカショエーラ（早瀬）多く、引っ張り多し。食事も相変わらず。ピュンも相変わらず多し。津田の病気相変わらず、皆が心配している。



20日 津田と腰痛のマテウスにベニシリンの注射をする。7時半出発。ヤマハのエンジンの調子はわるく、ノロノロ走行でありあまり進まず。16時、マブラウ河との出会いで停船。この地点はアリが多く、上から落ちてくるし、下からズボンの中を登ってくるし

防ぎようがない。3cm以上あるのもある。アリにくらべれば、ビュンなどは可愛いものだ。とにかく痛い。

10月21日 FUNA Iらは我われ3名と他に3名を残して、ワイカに向かう。暑さとビュンとアリとで、全員バテ気味である。「忍」の一字。昼にアントニオが野ブタ(カチート)を獲ってくる。夜が待ち遠しい。ビュンがいなくなるからだ。津田のリューマチ性の病気は全身に広がる一方で手指の関節を曲げるのも痛い。

22日 朝、昨夜から焼いておいたカチートの肉を食べる。ロースハムのように美味。昼もカチート。12時半ごろFUNA I一行が帰ってくる。3名の新しいワイカが加わっている。おばあちゃんと孫兄弟である。女の子(8才位)がワウデマ老の奥さんになったとか。驚く。16時から雨。日本から持ってきたフライシートが役立つ。久しぶりに水浴する。

23日 7時出発。昼から激しい雨。ふるえる。16時半トトトビ河合の仮小屋に着く。すでにブラジル・ナッツがインディオ部落から運ばれて山と積まれてあった。これをマナウスまで運んでゆくのだ。これもFUNA Iの仕事の内。ここから、インディオの部落まではトトトビ河の水

量が少なく、カヌーで行けず、徒歩の強行軍になるので、津田歩行困難のため残留。またFUNA Iのリーダー、エスメラソンも体調思わしくなく、FUNA I勢は残留に決定。この旅行の最大の目的である「交換」はここでするとのこと。

10月24日 朝、松本と藤本はポストのワウデマ、カーロス親子を案内役として部落に向けて出発。マナウスから持ってきた交換用の物資食糧は後から持っていくことにしサブ・ザックの軽装で行く。11時半、パキダリ族のジュゼ首長の部落に着く。宿泊。

25日 6時、ジュゼ・パキダリをあとにする。疾風のごとくジャングルをかけぬける。マラソン・ボッカで11時半、シリアナ族のロベルト首長部落に着く。松本はロベルト、副首長アントニオらと再会。部落駐在のミッションーブルース氏、キッチ氏に再会。プリニョ、フィアーリョら、シリアナ族の首長と再会。藤本はみな初対面。夜、ブルース家にて夕食。部落にて寝る。このロベルト部落がベースとなる。

いっぽうジュゼ部落の一行10数人が仮小屋に出向いて来、FUNA I、津田とそれぞれ物々交換し、2泊していく。

26日 ロベルト、プリニョ、フィアー

リョ以下多数のインディオがカヌーと歩きでトトビ出合のFUNAI—エスメラジンに会いに行く。道案内のワウデマ、カーロスも帰る。終日、ロベルト部落の調査。ホコワフリテリ族の5名来る。キッチ氏宅にて夕食。

10月27日 午前中、フィア—リョとブリニョの部落が新しい共同家屋を建設中というので写真と記録に行く。

いっほり仮小屋ではジュゼ一行発つ。隊の荷物をもっていってもらう。いれらがいにロベルト、ブリニョ、フィア—リョ部落から15人来る。FUNAIと交換。フィア—リョにはじめてのラジオが与えられる。3首長とも病気の津田と握手するのを敬遠。

28日 我われの荷物がジュゼの部落まで上ってきたと聞く。夜は彼らの歌を録音。

いっほり仮小屋では、カヌー2隻にカスターニャ・ナツを満載して、FUNAI、津田ほかポストへ向けて発。ロベルト部落の男の子が加わり、各部落からポストへの移住者は計4名。

29日 朝は焼きバナナ、マンジョーカサトウキビ、魚を食べるが、もうひとつ満腹感なし。昼過ぎにブリニョ、フィア—リョがFUNAIとの交換から戻ってくる。

荷物をつめたキスリング・ザックが1つ到着。夕方に待望の残りの食糧、交換物資(みやげ物)すべてが届く。テープレコーダーとEEカメラをミッションに贈る。食糧は1カ月間にしては不足気味か。バラフリから首長2名来る。夜はさっそく、お粥と味噌汁。ミッションの空き家を本部とする。

10月30日 朝、もうインディオ達が家のまわりに多勢すわり込む。交換を待っているのだ。荷物を運んでくれた7人に包丁、シャツ、ハンモックを与える。その後、ブルース氏をともなって交換。予想以上の品物が集まる。夕方、ホコテリ族の首長ダヴィが来る。夜はお粥とスープとロベルトにもらった玉子で目玉焼き。いっほり津田、FUNAIら、ポスト着。以後療養をかねて調査。

31日 昼過ぎにフィア—リョ部落に行く。畑などを記録。交換する。夕食はバナナ1本のみ。宿泊。

11月 1日 朝、カライモと魚を食べてロベルト部落に帰ってくる。休養日。ミッションからパイと果物。

2日 ブリニョ部落に行く。ブルース氏、キッチ氏とジョージと我われ2名で向かう。交換。調査。

3日 調査、撮影。食物は豊富で困らず。夜は歌を聞く。

4日 朝から雨。11時半、ロベルト

部落へ、2時に帰還。

- 11月 5日 画期的な出来事が出る。ローザが出産。現場を目撃、撮影。胸がワクワクする。じゃっかん、あせり気味。夕方、テレコでワイカの歌などを聞かせてやる。アリの大群を殺す。その数、数千は下らない。ブルース氏にカジューをもらう。食べることがかなりの比重を占める我われにはうれしい。朝 — マカロニ・バナナ、昼 — イモ・バナナ、夕 — イモガユ・バナナ、夜 — みそ汁。藤本、ち。
- 6日 昼食にカボチャを食べる。部落の男達はほとんど出はらって女性ばかり。終日、記録に追われる。
- 7日 午前中、ジュゼの奥さんやフィアリーヨ部落の女性が来る。我われはブルース氏に3時間ほどヤノマムに関して質問する。午後、ブリニョ部落へ。部落の建設がかなり進んでいる。鳥肉、焼バナナなどを持ってきてくれる。夜、ダンスが始まる。撮影と録音をする。そのうちにいっしょに加わり、踊り始める。1時間ほどでバテたが、なかなかやめさせてくれない。こっちも狂い始めて阿波踊りやバンザイ踊りをやると、彼女達もまねをして喜ぶ。 — とうとう3時間以上も踊って、最後はアアアアと歓声をあげて終了。疲れ

たが、アマゾンに来て最高に楽しい一夜だった。

- 11月 8日 7時、ブリニョ部落を出発しインディオの案内でパラフリ部落に向かう。水に何度もつかりながら、3時間のマラソン・ポッカ、10分休憩、2時間マラソン・ポッカの後、足ガタガタになる。さらに1時間行って、ギブ・アップ。ここで眠って明日出発したいとゼスチャアで告げる。トトトビの水を飲む。うまい。彼らは木の皮をはがして、あっという間にハンモックを作る。インディオがしとめた鳥を食べる。満足。
- 9日 インディオにシャツを与え荷物をかつがせる。さすがの彼らも1時間近く行った地点で休憩。少し行って、パラフリ族の首長のトメに出会う。ブリニョ部落に行くとのことだったが、また我われとともに、部落へ引き返す。いきなり急な山道になる。全員バテるし空腹である。トメは一足先に食事の用意をしにゆく。標高500~600mのあたりに、ようやく部落。ものすごい山奥だ。ベネズエラとの国境だろう。昼前、パラフリ部落着。
- 10日 朝、焼畑を見に行く。撮影、調査。急にジョージがFUNAIからの手紙をさけて来る。「帰れ」との指示である。明日

- ロベルト部落へ帰ることにする。それにしても、いきなりだ。予定大幅に狂う。
- 11月11日 6時半、バラフリ発。16時半ブリニョ部落通過。18時、ロベルト部落着。FUNAIからの出迎え2人と会う。藤本のクツは破れ、3時間ほどサンダルで走る。彼の足はガタガタ。夜おそくまでブルース氏宅で記録。最後の追い込みで必死。
- 12日 朝、残った食糧を思い切り腹につめ込む。初潮小屋の写真を撮る。キッチ氏宅で会食。記録・資料の整理。最後に写真を取りまくり、パッキング始める。思いがけぬ帰還命令なので、予定がすべて狂い、焦る。
- 13日 8時半、ロベルト部落の住人とミッションに別れを告げる。15時、ジュゼ部落通過。17時、泊。
- 14日 7時前発。8時にトトビ河出合着。ポストから出迎えの4人とともにカヌーでポストへ9時前。17時停。
- 15日 6時発。18時、ポスト到着。FUNAI勢、津田と合流。
- 16日 調査結果の整理をはじめる。
- 17日 松本、カメ獲り。藤本、津田、ポスト住民の婚約パーティーに列席シアヒルをたらふく食べる。
- 18日 松本、藤本は釣りへ。
- 19日 あい変わらず調査記録の整理と検討。ポストのインディオの身体測定を行なう。
- 11月20日 FUNAIは朝から晩まで焼畑を行なって、泥んこに働いている。エスメラジンも疲労の色が濃い。今回はいろいろアクシデント続きで、心身ともに疲れきっているだろう。カフェも底をついてきた。松本は連日、午後からは魚釣りにはげむ。
- 21日
- 22日
- 23日
- 24日 ポストのインディオが全員、部落へ旅行とって上流へ出発。みんなうれしそうだ。ポスト、不気味に静まりかえる。我われも明日帰るとのこと。荷物パッキング。夜、月が赤い。
- 25日 7時、ポスト・アジュリカバ発。ヤマハ付のカヌーで行く。雨が降ったとはいえ、いまだ水量少なく、コースを探しながら行かねばならないので、思うように進まず。6時半、広い浜辺にとまる。ブラジル人の1人がカメの卵を100個ほどとってくる。ゆでたまごにするが、思ったより味がしつこく、多くは食べられず。
- 26日 6時半発。エンジンの調子がい変わらず悪く、距離がかせない。夜は民家でカメ料理をよばれる。
- 27日 昨日途中であった小型船と結合して行く。8時、アラサ河出合。12時、ネグロ河に出る。昼食はまたカメ。16時、バルセロス着。18時、唯一のホテルへ

「オテル・ムニシパル・デ・バルセロス」

に入る。

- 11月28日 マナウスまで帰る船がないとい
うのでエスメラジン、終日探し
まわる。
- 29日 結局、足もとを見られ高くつい
たが1隻チャーターして14時
半、なつかしのマナウスへ、出
発。24時停。
- 30日 食事はカメばかり。22時停。
- 12月 1日 4時発。エンジン不調。19時
停。
- 2日 6時発。14時半、マナウス着。
15時半、学生寮着。寮のみんな
と再会。
- 3日 休養日。津田は連日病院通い。
- 4日 領事館に報告。
- 5日 日本テレビ『すばらしい世界旅
行』のスタッフ(豊臣靖氏以下
3名)と会ひ。以後、情報を提
供・交換。
- 6日 FUNAIにあいさつ。
- 10日 野球大会。
- 13日 外国人登録する。
- 14日 寮生の卒業式があるので、父兄
が南部のパラナ州から20数名
来たる。撮影したスライドなどを
上映したりして大いにモテる。
- 21日 卒業生送別会。以後、卒業生つ
ぎつき帰る。
- 28日 ブラケクアラのNew Tribe
Mission のキャンプに行き
ブルース氏と再会、さらなる情
報聴取をする。また、つぎのロ
ベルト部落への飛行機便の便乗

を申し入れる。

1973年

- 1月 1日 新年祝賀会。久し振りの巨大な
日の丸と君が代。清酒をのむ。
- 2日 日米ソフトボール大会。学生寮
植民地チーム対ミッションで行
なり。ミッションは次便、空軍
機で行くので空軍と交渉したら、
とのこと。
- 3日 空軍に行くが責任者に会えず。
- 4日 空軍。
- 5日 空軍。あいかわらずブラジル方
式になやまされる。いわく「明
日こい」
- 8日 空軍に連日通り一方、交渉不調
の時は藤本、津田は帰国するこ
とになり、FUNAI、INPA(国立アマゾン
ア研)に民具
持ち出しの許可を得る交渉をは
じめる。帰国準備に入る。
- 15日 再びミッションのキャンプに寮
生とともに行き、バレー、ソフ
トボールなどをして交歓。アメ
リカ人はこの国ではあまり好か
れていないので、さびしいのか
もしれない。とても喜んでくれ
た。空軍機はもうトトビへ出
発したことを知らされる。
- 16日 INPAとFUNAIから民具
持ち出しの許可書がおりる。藤
本と津田の帰国準備に走りまわ
る。
- 19日 藤本、津田、マナウス発。グァ
リグ機で。以後、メキシコ經由
し北極廻り日航機で21日、東

- 京着。
- 1月22日 松本、FUNAIのポスト話し合い、明日ジャタブ河へ行くとの返事。
- 23日 「中止」の返事。
- 2月 7日 この件につき事情をききにFUNAIに行く。
- 9日 3月に入城できるとの返事。
- 13日 領事館。ビザ延長の件。
- 14日 ビザ延長手続。
- 18日 ヤノマムの担当者のエスメラジンが配置がえになる。このとき日本テレビのスタッフらはボア・ピスタでかんづめ状態。
- 20日 延長ビザ取得。日本TV豊臣氏と会談。現在、風邪が流行しているので奥地への入城は不可能とのこと。
- 2月22日 FUNAIとミッションと話し合い。風邪で当分入城はむずかしいとのこと。3月15日を目ざして帰国することを決める。
- 29日 空軍に最後の期待を託して便乗交渉。不調。日本TVの帰国を手伝う。
- 3月上旬 お世話になった機関、方々にあいさつ回り。
- 15日 寮でお別れパーティー。
- 16日 マナウス発(ヴァリグ機)。メキシコーロス経由で。
- 19日 東京着。

(津田)

＝アナコヘリン騒ぎ＝

ヤノマムへの第1回目のアプローチのとき、ポストを出て3日目の晩、我われ(FUNAIとインディオと松本)の6人は即席の屋根をつくり野営した。夜ワウデマが壊中電灯をてらして「アナコヘリンだ」と騒いだ。私もエスメラジンもアナコヘリンとはいかなるものや? たかが虫けら1匹といていたが、さすがに心配で「さされたら痛いかな?」と聞くと「痛い」というので、「死ぬか?」と聞くと「死ぬ」と答えたので、これはたいへんだとばかり、見つけて殺せとばかり、必死になって、やっとのことで探し出して殺した。これ以後6人の間で何かあると「アナコヘリン」と驚かすのが流行した。

Y. M